

セルフ・ナラティブ再構築過程における詩的探求

川浦 佐知子*

Poetic Exploration in the Reconstruction of Self-Narratives

*Sachiko Kawaaura

*Department of Psychology and Human Relations, Nanzan University

This paper concerns the exploratory nature of the reconstruction process of self-narratives that is often triggered by turning-point experiences or movement into different life-stages. Utilizing cases in which individuals attempted to generate more satisfactory plots for their self-narratives, the study focuses on the role of images in the process where meanings of experienced events are sought. Some of the findings are; 1) Images provide opportunity to build new perspectives with which narrators examine experienced events in new light; 2) Images reveal possibilities and choices which narrators might otherwise not be able to become aware of; 3) Images work as a catalyst that evokes long forgotten memories, bridging the narrators' current concerns and events occurred far in the past; 4) Images support the poetic exploration process in which narrators seek different ways to bring diverse episodes together, keeping the integrity of told stories. Multi-layered nature of human experiences is well expressed through images. Narrating stories, which is uniquely human and linguistically oriented, consists of visual aspects, such as images, that await further interpretation.

キーワード

自己物語 self-narrative

詩的探求 poetic exploration

転機体験 turning-point experiences

イメージ images

時間体験の再構築 reconstruction of experienced time

I. 自己の語りとその再構築

我々は他の誰でもない、ユニークな自分というものをどのようなやり方で把握、理解しているのだろうか。その手法は一通りではないが、どのようにして現在の自分に至ったのかを他者及び自分自身に対して説明しようとする際、往々にして我々は過去の経験を自分なりの因果関係の基づいて関連付け、「物語」として提示する。個人の過去と現在を繋ぐセルフ・ナラティブは自己理解の手法のひとつであると同時に、その産物でもあるわけだが、そのプロット（筋書き）は今の自分を説明するにふさわしい過去の出来事が選び出され、関連付けられることによって生み出される。このプロットは過去の一連の体験に意味を与えるのみならず、「今」を生きる上での行動指針や、将来の方向性としても機能する（Sarbin, 1986）。

自己の語りを貫くプロットは個人の過去、現在、未来を貫く内的一貫性の礎であるが、自身が培ってきた価値観を脅かすような転機の体験や、新たなライフ・ステージへの移行の際には、プロットの見直しが必要とされる（Ben-Ari, 1995）。その折には過去の体験を吟味、咀嚼し、繋ぐ試みがなされるわけだが、そうしたセルフ・ナラティブ再構築過程においては、既知のプロットに沿ってエピソードを配する半ば習慣的な内的過程とは大きく異なる、詩的探求と呼ばれるような内的作業が関与している。実際、新しいプロットを生み出さそうとする過程における語りは、体験のディテールを尊重しつつも、イメージや隠喩にもとづいて大胆に出来事を関連付けるような、意味探索的なものとなる傾向がある（川浦, 2005）。

ブルーナー（Bruner, 1986）は、人間の基本的認知モードを大別して“論理－科学的思考”と“ナラティブ思考”と名づけ、前者が具体的出来事の一般的原因の究明を目指すのに対し、後者のナラティブ思考は出来事間の関係を説明する筋立ての構築や体験の意味の追求を目指すと述べる。「人間の体験を組織化する原則は、論理的証拠を築くものよりは、どちらかと言えば詩的意味を形成するものに近い」（Polkinghorne, 1988, p. 11）とポーキングホーンは述べるが、様々なエピソードがイメージや隠喩を通して緩やかに繋がれ、その重なりによってプロットの原型ともいうべきテーマが浮かび上がる意味探索型の語りでは、ブルーナーが述べるようなナラティブ思考が遺憾なく発揮されるといえる。

詩的探求のプロセスにおいてイメージは大きな役割を担っているが、イメージが絵画、コラージュ、フリー・ライティング等を通して具象化されることは、過去、現在、

未来を新しいやり方で紡ぐセルフ・ナラティブの形成に大きな貢献をもたらすと考えられる。具体的な貢献としては、1) イメージを通して、自分の状況を見つめる新しい視座が得られ、それによって自身の方向性が見出される、2) イメージを通して、遠く時間を隔てた出来事が関連付けられ、より納得のいく体験への意味づけがなされる、といった点が挙げられよう。

本稿では上記の2点について具体的な事例を挙げながら、セルフ・ナラティブ再構築過程における詩的探求の様相を検討する。

II. 新たな視座の構築：事例①杉山さん（仮名）

30代女性である杉山さんは母親との死別、恋人との別離を体験し、将来の展望を描けずにいた折に、筆者の実施した“ナラティブ・アプローチ”のワークショップに参加。夢から得たイメージやコラージュ作成を通して、自分を支える信仰を再発見し、別離を新しいスタートして見る視点を得ることとなった（川浦，2005）。ワークショップは約21時間、5日間にわたる集中型のもので、転機を意識した物語作成を目的として構成された。参加者は順を追って、下記の内容に取り組んだ。

- 1) 現在の自分を語る上で重要な過去の出来事をリストアップし、そのなかから探求してみたい出来事を選択。選んだ出来事の具体的状況を様々な角度から検討する。
- 2) 最近見た夢で気になっているものを選んで取り上げ、ゲシュタルト療法の手法を用いて検討する。
- 3) 1) で選んだ出来事を中心に、自分の過去、現在、未来を、夢から得たイメージも用いながら繋いでみる。
- 4) コラージュを作成してイメージを膨らませた後、三人称で自分の物語を書き、それをペアで分かち合う。

ワークショップ終了から半年あまりを経て行われたインタビュー冒頭で杉山さんは、「辛いことが3年くらい続いてもうどうしようもない」状態でいたこと、離別、死別の体験によって「これはこれで気を取り直していこうとか、これはこういう風に終わっちゃったけど、まあまた明日があるさっていう風にはとても思えない」ほど、前へ進む気力を失ってしまっていたことを語った。「自分の物語がもう終わってしまったような気持ち」という言葉からは、それまで培ってきた自己一貫性が打ち砕かれてしまった様子が伺えるが、「明日」というかなり近い未来さえ思い描けないでいた杉山

さんに、新たなセルフ・ナラティブを紡ぎ出す力を与えたのは、夢で得たイメージであった。

杉山さんがワークショップで扱った夢は、実家からの道をひとり暮らしをしている現在の住まいへ向け、スクーターに乗って走るというものであった。杉山さんは夢のなかのイメージを扱うことで、「あの道には意味があった。過去から繋がっている大事な道で、向うからこっちへとビューンって入ってきたのには意味があった」という自分なりの理解を得、それをもとに未来への展望を描き始めている。

夢を見て（それを）語っているときにはぜんぜん思いもしなかったんですけど、こう彼女（夢の中の当人）がもう自由になると聞いて、彼女はもう役割から解放されて、自由に身軽なスクーターに乗って、やりたいことや望むことをやる時に来たんだよっていうことを（フリー・ライティングのなかで）書いていて。（中略）その時、本当に楽しいとか、気持ちがいいとか、心がちょっとでも明るくなる要素が全くなかったので、何もしたくないっていうか、もういいっていう感じだったんですけど、この夢のイメージを自分のなかでこう感じる事が、唯一自分のなかで未来を信じられる取っ掛かりになった。

それまでの「自分の路線」が転機の体験によって打ち砕かれ、自分の過去と未来を繋ぐ新しいプロットをどのように構築していいのか見当さえつかずにいた杉山さんであったが、夢で得たイメージを通して「役割からの解放」、「自由」といったテーマを見出し、それを頼りに未来を展望しようとしている様子が伺える。

自分の価値観を根本から覆すような転機体験に意味を見出すには、体験の地平から離脱し、過去、現在、未来を俯瞰する視点を得ることが必要であるが、杉山さんの場合それはコラージュ作成を通して成し遂げられている。杉山さんは熱心なクリスチャンであったが、度重なる辛い別離の体験に信仰心が揺らいでいた。そうしたなか「もう一回神様に語りかけるような気持ち」で取り組まれたコラージュ作品は、絶望の淵にありながらも光を見出だそうとする杉山さんの祈りが感じられるような作品であった（図1）。

ナラティブ言説は人間の時間体験の表現として見ることができる（Ricoeur, 1981）が、その語りのプロセスにおいてはハイデガー（Heidegger, 1927）が述べる、現在



における過去の理解（記憶）、現在における現在状況の理解（意識の方向性）、現在理解している将来（期待）という、現在の3つの層が統合へ向けて纏り合わされることとなる。杉山さんの場合、夢を通して得られたイメージを扱うことで「現在における未来の理解」が意識化され、更にイメージの駆使が要求されるコラージュ作成作業のなかで、転機体験を俯瞰しながら自分の過去、現在、未来を統合するために必要な視座が獲得されている。

転機の体験を踏まえつつより納得のいくプロットを構築し、「ナラティブの質的向上」(Polkinghorne, 1988)を図るには、新しい視点から過去を検証することを可能にする視座が必要となる。そうした視座を杉山さんはコラージュ作成を通して得たわけだが、ワークショップ終盤実際に彼女が創作した物語は、杉山さんの祖母や母親の体験がベースとなった三世代にわたる女性の物語であった。物語作成を通して杉山さんは、それまでの「恋人に裏切られ傷ついた」という筋書きから抜け出し、「結婚するとか家族をもつということはすごく重いこと」で「ものすごい責任」が伴うと感じていた自分がどこかにあったから、最終的に別離という結果に終わったのだという理解をするようになった。また自身の信仰心についても、「安心して信じられる存在」、「本当に心を任せられる大いなるもの」を求めていた祖母と母の思いを、自分も受け継

いだのではないかと考えるようになった。

物語作成過程、及びそれによって得られた理解について、杉山さんは次のように語っている。

何かこう一歩ずつ（手順を踏んで）考えていったときに、あっこれは私が単にあの人と出会って分かれて傷ついただけじゃなく、もっと前から何か繋がっているものがあるなって分かってきて。（中略）自分の根幹に関わるくらい傷ついたらってことは、そこだけの問題じゃなかったからっていう気も、うすうすはしていたんですけど。これは私の代だけじゃなく、母とその母との間でこう繰り返されてきたパターンがここに凝縮されているって、そのときに思っ。（中略）ああこれを私はしたかったんだ。こうやって祖母の代から、うちの母と私の関わりを見つめなおしたかったんだっていうのを、（物語を）書いているときにずっと思っていた。

転機体験によって再構築を余儀なくされた杉山さんのセルフ・ナラティブは、三世代という、長いタイムスパンを俯瞰する視座を得て、当人にとってより納得のいく、新しいプロットの形成を経て再生した。夢のイメージから得られた「解放」、「自由」というテーマも、再構築されたナラティブの全体像を踏まえながら考えるならば、世代を超えて繰り返されてきたパターンからの解放という見方をすることが出来る。

セルフ・ナラティブ再構築のためには、自己理解の深化とそれを促す視座の再構築が必要となるが、それは過去のみを検証していればたちあられるものではない。現在における未来の理解、可能性、期待といったものがある程度なければ、過去と現在を納得いくかたちで繋ぎつつ、未来へと自己を誘う物語は形成されないであろう。過去、現在、未来を新しいかたちで繋ごうとする詩的探求過程において、イメージは個人の未来に対する期待や願望の意識化を助け、また何をどのような視点から語るのかという点についての手がかりを与えるといえよう。

Ⅲ. 時間軸の延長：事例②アンさん（仮名）

暗闇や森を恐れる60代アフリカ系アメリカ人女性アンさんは、自身の闇への恐怖と、祖母や母が体験した人種差別にもとづく暴力への恐れとを関連付け、それによって自身の行動、反応の所以について新しい理解を得ることとなった。そのきっかけとなっ

たのは、フリー・ライティングを通して得られた柳の木のイメージであった。

「エコロジカル・セルフ」(Naess, 1988) という概念を核に、女性が自然とどのように関わり、その関係にどのような意味を見出しているのかを研究するために実施したインタビュー (kawaura, 2003) での、彼女の語りの冒頭を要約すると次のようになる。

アンさんは当初、自分が山や森など自然豊かな環境に身を置くことに抵抗を感じるのは、個人的好みの問題であると考えていた。その一方で彼女は、子どもたちにとって自然と触れ合うことは大切であると考え、学童期には彼らを夏休みの森林キャンプに送り出すということもしていた。自然体験の重要性を認識しながらも、自分自身の意識、行動の範疇に少しも「自然」が登場しないことに疑問をもつようになった彼女は、ネイチャー・ライティングのワークショップに参加。与えられた課題についてフリー・ライティングをするなか、彼女の意識に柳の木のイメージが浮かび、「体が悲しみでいっぱいになる」という体験をする。

ライティングを通してアンさんは、人種差別による度重なる暴力を目撃してきた森の柳の木が、森でリンチに遭い命を失った彼女の親族の死を悼むというストーリーを見出し、それをきっかけに祖父母が体験したアメリカ南部での人種差別の体験と、自身が森や暗闇に抱く恐怖を関連付け、新しい視点からセルフ・ナラティブを再構築することとなった。

柳の木のイメージを媒体に祖先の体験と自分の体験が繋がれたことで、アンさんは自分が自然に慣れ親しめないのは単なる個人的理由によるものではなく、そこには歴史的、社会的要因があることを確信するに至った。南部で暮らした祖母は夜襲から子どもたちを守るため、夜も警戒を怠らなかった。彼女の父や男兄弟は人種差別に基づいた暴力に怒りを募らせたが、母やその娘である自分は恐怖をその身にしみ込ませて生きた。柳の木のイメージを頼りに紡がれた語りのなかアンさんは、孫娘である自分を危険から守ろうとする祖母から、幾度となく聞かされた「森へ行くな」、「夜出歩くな」という教訓によって、いつの間にか自身の行動が規制されてきたことに言及している。

祖先にとって自然とは神の栄光が示され、その美を人が愛でる場所ではなく、命を脅かす蛮行が行われる場所であったのだとアンさんは語っているが、語りを通して得られた理解について、彼女は次のように語っている。

キャンプしたり、アウトドアで過ごすことをしない自分のことを、それまで気にしていたんです。私は怖がりの猫みただった。でも私の祖先は原野 (the wilderness) を恐れる理由があった、ということに気づいたんです。南部で親戚が殺されているし。(それに気づいたことで)私はすごく自由になった。私個人を超えたものが影響していたんだと分かって、何かとても解放されたんです。私の生き方をこれまで左右してきたものが何だったのか、その正体が分かって自由になれたんです。

アンさんの場合、ナラティブ再構築過程における詩的探求において柳の木のイメージがきっかけとなり、時間軸が延長されたプロットが形成されたわけだが、それによって彼女はそれまで納得いく説明ができずにいた自身の意識、行動の由来を知ることとなった。それまで個人的レベルにおいてのみ理解、解釈されてきた体験が、延長された時間軸をもつプロットに配置されたことで、歴史的、社会的レベルにおいて見直され、人種差別という外的抑圧が長年に渡って完全に自己のうちに取り込まれ、内的抑圧として彼女の生き方を制限してきたという、意味づけを得るに至っている。「解放された」、「自由になれた」という彼女の言葉からは、長いタイムスパンをもつ新たなプロットの形成によってもたらされた「ナラティブの質的向上」への満足と、新たなプロットが示唆する今後への期待が伺えよう。実際インタビューでの語りにおいて彼女は、自分の行動一般を縛ってきた過去からの呪縛を解き、それまで「危険だから」、「リスクが高いから」と自分に許してこなかった様々なことに挑戦するようになったと述べている。柳の木のイメージは、彼女のうちにありながらアクセスが出来ずにいたエネルギーを解放する役目を果たしており、その点において彼女の語りは歴史的、社会的奥行きをもつエンパワメントの語りであるといえよう (川浦, 2004)。

アンさんの場合、彼女にナラティブ再構築を促したのは価値観を揺るがすような衝撃的な転機体験ではなく、これまで十分に理解できずにいた自身の認識と行動のギャップへの疑問の深まりである。そうした彼女の問いかけに応じるかのように表れた柳の木のイメージをきっかけに、アンさんは遠い過去へと意識を向け、祖先の自然体験と自分の自然体験のつながりを見出そうと、インタビューでの語りにおいて実に意欲的に様々なエピソードを登場させている。

ビジョン・クエストのワークショップに参加し、生まれて初めて原野でひとり昼夜を過ごした体験、祖母の南部での体験、貧困や暴力から逃れようとニューヨークへと

移り住んだ父母の体験、ニューヨークでの自身の生い立ちや子育ての体験、美術館でのモネの絵画鑑賞、インド、トルコ、アイルランドへの旅の体験、孫との死についての会話など、多様なエピソードを縦横無尽に繋ぎながらも、その語りが散漫なものとならず、ある全体性を保っているのは柳の木のイメージによるところが大きい。様々な角度から祖先の体験と自身の人生体験の繋がりを吟味、検討しようとするアンさんの試みの核に柳の木のイメージがあり、語りのなか、多彩なエピソードが柳の木のイメージを中心にちりばめられているように見ることができる。

ナラティブ再構築過程における詩的探求において様々なエピソードをもちだすことで、アンさんは「自然」を再定義するというをしている。夜明け前の瞑想を通して自身の内なる自然に触れたインドでの体験、旅先で原因不明の咳に悩む自分を癒してくれたトルコ人女性との出会い、暗闇を恐れず断崖絶壁の道をリードしてくれた足の悪い友人とのやりとり、ニューヨーク近代美術館で時を忘れ、飽きることなく見つめたモネの睡蓮の絵との対話など、一見すると自然体験とは関わりのないようなエピソードを連ねることで、彼女は自分が自然というものに対して抱く「明」と「暗」の両側面を表現している。彼女が感じる自然には、ベビーカーを押しながら歩いた桜並木の思い出や、モネの絵画から感じられる光に代表されるような明るい側面と、暗闇、暴力、危険、犯罪、死といったものを思い起こさせる暗い側面とがあり、特に後者を彼女は「森」という隠喩を用いて表現している。

アンさんにとって森は、前述の祖先の死を悼む柳の木を内包するものであり、祖先の集合的記憶が葬られている場所を示唆するものであるが、語りのなか彼女は森というメタファーを用いることで個人を超えた、多重な層をもつ恐れを表現している。そしてそうした恐れからの解放を、「私のなかの凍った森が溶け出した」と表現している。語りにおける「詩的意味の形成」は、全く同じではないものの類似点のある経験を結びつけるといった、隠喩のプロセスを通してなされる (Polkinghorne, 1988) が、アンさんの場合、過去を鮮烈に想起させる柳の木のイメージを中心に、この隠喩のプロセスが森というメタファーを用いて見事に展開されている。

セルフ・ナラティブ再構築において、時間軸が延長されたプロットが形成されることは珍しくない。特に人生の後期にあたり、自身の人生全体をより深く理解しようとする際には、自分より前の世代にまで遡り、祖先の体験と自身の体験を比較したり、関連付けたりするケースが多いように思われる。自分が直接体験していない過去の出来事と、自分の人生体験とを結び付けることでより深い意味を見出そうとするナラ

タイプ再構築過程において、不確実な要素が多くなるのはやむを得ないが、アンさんのケースを見るならば、そうした不確定要素を孕んだ遠い過去も、イメージの仲介によって語り手自身が生きる現在と結び付けられ得ることが分かる。厳格な観測や史実との一致を目指す「歴史的真相」とは異なり、「ナラティブの真相」は多重な記憶の層から、一連の出来事を説明する首尾一貫した理由を紡ぎだす (Spence, 1982)。そうしたナラティブの真相の構築において、イメージの貢献は大きいと考えられよう。

アンさんの事例からは、1) 詩的探求過程においてイメージが過去と現在を繋ぐ役割を担うこと、2) 探求型の語りにおいて散漫になりがちなエピソードが、イメージによって繋がることで、詩的探求過程全体が支えられることが伺える。また3) イメージは語り手の豊かな内的世界を表現しつつ、聴き手である他者にも説得力をもつ隠喩の到来を呼び起こす、ということもいえよう。

IV. おわりに

ここまでセルフ・ナラティブ再構築過程における詩的探求の特徴について、イメージが齎す貢献を中心に事例とともに述べてきた。杉山さんの語りは、転機体験により機能しなくなったセルフ・ナラティブを見直し、自己を再生するためのプロットを模索する語りであり、アンさんの語りは、それまで充分意識されずにいた体験に、何らかの意味を与え、次のライフ・ステージに備えるための語りであった。杉山さんのケースでは、夢で得られた未来への展望を予感させるイメージが詩的探求過程において大きな意味をもっており、一方アンさんのケースでは、祖先の体験という遠い過去の理解を促す柳の木のイメージが重要な意味をもっていた。このように個人をナラティブ再構築へと向かわせる動機や、イメージが指し示すベクトルに違いはあるものの、両者の詩的探求過程には、個人という枠組みを超える時間軸の延長や、大きな連関のなかに自己を置く視点の導入といった共通点が見られる。とも三世代に渡る時間軸をその語りに導入していると同時に、杉山さんのケースでは「神」という大いなる存在との内的対話、アンさんのケースでは「柳の木」の視点から祖先の体験を見るという内的作業が、詩的探求過程において起きている。また両者ともナラティブの再構築過程を通して、「解放」、「自由」といったテーマにいき当たっている。

ナラティブ再構築過程におけるイメージの役割をまとめるならば、1) 転機体験やこれまで十分に吟味されてこなかった体験を、新しい視点から眺めるための視座を確立するチャンスを与える、2) 当人が気づけずにいる未来の可能性や展望を示唆する、

3) 埋もれていた記憶が呼び起こされ、遠い過去と現在が繋がる、4) 探求的な語りのダイナミズムを支え、語りに推進力を与える、といった点が挙げられよう。

物語するという行為は人間独自の活動であり、元来探求的、創造的活動である。そしてその創造的探求を支えるのがイメージであるといえる。語り手にとってイメージは、語りえない、語りつくせないものを内包するものであり、その故に自身にとって重要なイメージは更なる語りのバリエーションを要求するであろう。そうしたイメージに導かれ、語り手は語るたびに新たな角度から体験の意味、失われた可能性、今後の方向性を探求することとなる。また聴き手にとって語り手が提供するイメージは、起承転結という直線的なプロットでは表しきれない、複雑で多面的、重層的な個人の体験のゲシュタルトを把握する手がかりとなるであろう。イメージはそうした語り手、聴き手の相互作用のなかでいのちを得て作用し、詩的探求の領域を語り手本人が予測もしなかったような域へと押し広げつつ、更なる解釈を待つのである。

引用文献

- 1) Sarbin RT: The narrative as a root metaphor for psychology, In "Narrative psychology: The storied nature of human conduct" ed Sarbin RT, 3-21, Praeger Publications, New York, 1986
- 2) Ben-Ari AT: It's the telling that makes the differences, In "Interpreting experiences: The narrative study of lives" ed Josselson R, Lieblich A, 3:153-172, Sage Publications, California, 1995
- 3) 川浦佐知子: 時を遡上する自己—物語創作における“自己一貫性”の再構築と“内在化する他者”の再定義, アカデミア人文・社会科学編, 81: 79-119, 2005
- 4) Bruner JS: Actual minds, possible worlds, Harvard University Press, Massachusetts, 1986 (田中一彦訳: 可能世界の心理, みすず書房, 東京, 1998)
- 5) Polkinghorne DE: Narrative knowing and the human sciences, State University of New York Press, Albany, 1988
- 6) Ricoeur P: Narrative time, In "On narrative" ed Mitchell WJT, 165-186, University of Chicago Press, Chicago, 1981
- 7) Heidegger M: Sein und zeit, Max Niemeyer, Halle, 1927 (細谷貞雄訳: 存在と時間, 筑摩書房, 東京, 1994)
- 8) Naess A: Self-realization: An ecological approach to being in the world,

- In "Thinking like a mountain: Toward a council of all beings" ed Seed J, Macy J, Fleming P, Naess A, New Society Publishers, Philadelphia, 1988
- 9) Kawaura, S: Pilgrimage to memories — An exploration of the historically situated ecological self through women's narratives, Nakanishiya Shuppan, Kyoto, 2003
- 10) 川浦佐知子：語りの力学—セルフ・ナラティブ（自己物語）を通してのエンパワメント，人間関係研究，3:122-134，2004
- 11) Spence D: Narrative truth and historical truth: Meaning and interpretation in psychoanalysis. W.W.Norton, New York, 1982